

Several thin, parallel white lines originate from the top right corner and extend diagonally towards the center of the page, creating a sense of movement and depth.

清明の子孫たち

2 人の陰陽師の物語

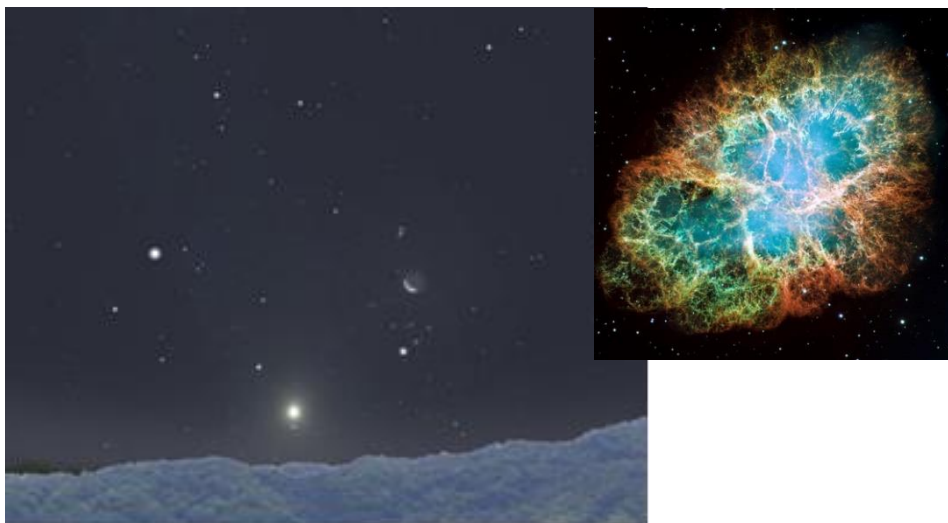
作花一志

坂田 肇

1006 年の超新星は晴明の息子である吉昌が観測記録していますが，安倍家の血統はもう一人の息子吉平が継いで行きます。この二人，どちらが長男か次男か？嫡子か庶子か？それは小説家にお任せしましょう。この超新星は公家の日記にも書か

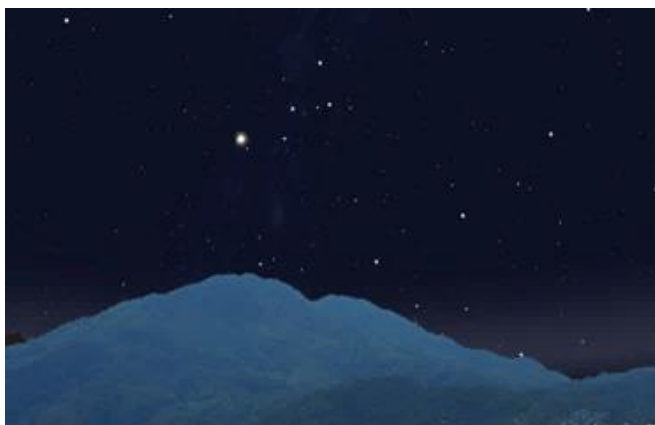


れています。中国（北宋）には詳しい記録があり 5 月 1 日の深夜に南の低い空で半月くらいの明るさで輝いたそうです。人類の見た最も明るい星で太陽・月に次ぐ明るさでした。現在は X 線や電波は発していますが光ではほとんど見えません。



1054 年の超新星出現時の天文博士は時親のはずだが、この人何をしたのかさっぱりわかりません。この超新星は 7 月 4 日の日の出前に東天に見られました。今の姿は有名な「かに星雲」(右図)で天体の爆発現象のモデルとして 20 世紀の高エネルギー天文学に非常に貢献していますが、出現記録はなぜか日本と中国だけでヨーロッパにはありません。20 世紀初にかに星雲が膨張していることが発見され、その原因として 11 世紀に星が爆発したのではないかと考えられ、世界中にそれらしき記録を探したところ京都から見つかったのです。これにより百人一首の選者である藤原定家は欧米の天文学者から非常に評価されています。かに星雲は電波・赤外線・可視光線・紫外線・X 線・ガンマ線・ニュートリノなどあらゆるエネルギーを発生し、毎秒 1500km の速度で膨張しています。その中心には毎秒数十回転もするパルサーと呼ばれる想像を絶する小さな星があります。

1181 年の超新星は 8 月 5 日の夜、東北の方向に現れました。当時の天文博士は泰親で鳥羽上皇、後白河法皇、摂関家から信頼厚い陰陽師でしたが、この天変を目撃したとい



う記録はありません。前 2 者よりは暗かったようで、その天文学的意義は別誌で述べるとして、泰親にとって有名なのは鎌倉地蔵伝承です。

左京区京都大学の東にある真如堂はもみじの名所として有名ですが、そこには鎌倉地蔵と呼ばれる石の地蔵菩薩像が祀られています。下野国（現在の栃木県）那須野の殺生石から造られたというものです。

この石、もとは天竺



君で有名)の後の姐妃(だっき)に化け、酒池肉林と色気で紂王を骨抜きにして殷王朝が滅ぶ原因となりました。また天竺耶竭陀(まがだ)国の王子、斑足太子(はんぞくたいし)の妃華陽夫人となって悪事を尽くしたそうです。

(インド)・殷(中国の古代王朝)・日本と、時間と空間を越え猛威をふるって暴れまわった妖怪狐が石と化したものといわれています。この妖怪狐は、紀元前 1100 年頃、中国の殷王朝最後の王の紂王(ちゅうおう：暴



その後、日本へやって来るのですが、遣唐使吉備真備（695-775）の帰国船の船底に潜んでいたそうです。吉備真備は言うまでもなく詩歌、歴史、兵学から陰陽道までに秀でた多才な学者であり、聖武・孝謙帝の厚い信任の下、平城京の朝廷で活躍した人物です。その後なぜか妖怪狐は12世紀の平安京の宮中に現れるのです。玉藻前（たまものまえ）という美女に化けて鳥羽上皇（1103-1156）に近づき、上皇の寵愛を受けるようになりますが、その後



上皇は次第に病に伏せるようになります。朝廷の医師も原因がわからないところ、陰陽頭（おんみょうのかみ）安倍泰親が玉藻前の仕業と見抜きます。安倍泰親が真言を唱えた事で玉藻前は変身を解かれ、白面金毛九尾の狐の姿で宮中を脱走し、空高く舞い上がったかと思うと行方をくらしました。その後、下野国那須野あたりで、この狐の仕業ではないかと思われる奇怪な出来事が幾度ともなく起こるようになります。このうわさを耳にした上皇は、三浦介（みうらのすけ）義明（1078-1180）と上総介（かずさ

のすけ) 広常(?-1183)という二人の武将を征討將軍に任命します。かくして 8 万余りの軍勢が那須野へ派遣され、妖怪狐の退治大戦が繰り広げられます。たった 1 匹の狐に翻弄されながら悪戦苦闘の末ようやく妖怪狐にとどめを刺すことができました。なお彼らは後年、源頼朝の挙兵に応じて鎌倉幕府の設立に活躍しています。この事件は鳥羽上皇と彼らの实在時期からして 1150 年ころと思われます。

ところがこれでめでたしめでたしの完結ではありません。妖怪狐が死んだ後、ここで奇怪な事が起こります。なんと妖怪狐の魂が石と化したのです。やがてこの石は、悪霊となり近づいた生き物を全て殺すようになります。そのことから、「殺生石(せっしゃうせき)」と呼ばれ、人々から恐れられるようになりました。このことを知った源翁禅師(げんのうぜんし:室町時代の僧)が、杖で殺生石を叩き割り、三つに砕けた石の一つで地藏菩薩を刻み、鎌倉に小さなお堂を建てて祀りました。江戸時代はじめ、日光東照宮を建てた大工の棟梁で、この像を篤く信仰していた甲良豊後守宗広(こうらぶんごのかみむねひろ)の夢枕に、この地藏菩薩が現われ、「我を衆生済度の霊場真正極楽寺(真如堂)に移して祀れ」とのお告げを受けて、現在の場所に遷座したと伝えられます。「鎌倉地藏」と名は、この尊像が当初鎌倉に安置されていたことに由来します。鎌倉地藏は家内安全・福寿・延命などのご利益の他、無実の罪に陥れられた人々を救ってくださるお地藏さまと信仰を集めています。

石割りなどに使う大きい鉄鎚(かなづち)を玄能(玄翁-げんのう)というのは、この殺生石伝説から名づけられたといわれています。

玉藻前の話は能や「御伽草子」で語られていましたが、江戸時代になると次第に尾ひれがついて歌舞伎・浄瑠璃などでも演じられるようになりました。それにしてもなんとスケールの大きい怪奇談ですね。

この物語は天文街道「神楽岡コース」でお話ししています。

土御門久脩と改暦

武士の世になって陰陽師は用なしになっていくのでしょうか？いやそうではなく、鎌倉幕府も蹴鞠、和歌、陰陽道など京の文化を導入し、鎌倉でも加持祈祷は盛んにおこなわれています。さらに室町三代将軍足利義満の時代に安倍有世（1327－1405）は公卿に列せられ土御門と名乗り、従二位まで昇進します。これより土御門家は足利將軍家にも仕えることとなるのですが、それは征夷大將軍&太政大臣となった義満の信頼を得ることに成功したからです。ただし天文觀測の記録はありません。戦国の世では陰陽師は天文觀測をしなくなったのか？それどころではなかったのでしょうか？戦国時代になると他の公家と同じく地方の有力大名のところへ疎開して、土御門家は若狭の名田庄（現；福井県おおい町）と京を往来していました。当時の天文博士は有脩（ありなが：1527-1577）、久脩（ひさなが：1560 - 1625）です。

永禄十一年（1568年）上洛した信長は迷信嫌いな合理主義者と思われていますが、陰陽師は排除していないどころか軍議にも参加させているようで、その様子が長篠合戦図屏風（大阪城所有）に描いてあります。ところがやはり旧勢力と衝突します。本能寺の変より9年前に信長は自分が担ぎ出した足利義昭を室町将軍から追放して、ここに室町幕府は終わる（義昭は征夷大將軍を罷免されたのでも辞任したのでもないで形式的には毛利領内で継続している）のですが、その時朝廷に強要して元龜から天正へ元号を変えさせています。これは改元の権限を奪うもので、朝廷へのものすごい干渉です。そして天正十年（1582年）、武田へ出兵の前に公の京暦（平安時代から使われていた宣明暦）を三嶋暦（当時東国で使われていた）に変えるように若き俊才天文博士である土御門久脩に伝えたそうです。三嶋暦のほうが正確というわけではなく、変更は閏月の置き方で、宣明暦では翌年一月の後に閏正月を置き、一方三嶋暦では年末に閏十二月を置くというだけのことです。ところが京の公家衆からするととんでもない越権行為、もしそうなれ

ば朝廷の正月行事は 1 ケ月ずれるだけでなく、陰陽寮の役人は当然総入れ

京暦 天正十一年の正月の次に閏正月			
十二月	正月	閏正月	二月
三嶋暦 天正十年の十二月の次に閏十二月			
十二月	閏十二月	正月	二月
旧暦では19年に7回閏月		たったのこれだけ？ でも大きな利権に絡む	

替え、その次に来るのは朝廷人事への口出し、左大臣右大臣からついには天皇の即位退位にも信長が干渉してくるに違いない。朝廷は関白・太政大臣・征夷大將軍のどれでも好きな位

を与えるという妥協案を示すが信長は無視したまま。すでに武田を滅ぼし毛利・上杉・長宗我部ももうじき制圧する勢いの信長はしつこく三嶋暦の採用を迫ります。正親町天皇、近衛前久をはじめ公家たちはオロオロ生返事。朝廷乗っ取りだ、もうやるしかない、そこで極秘のうちにできていた信長包囲策が動きます。謙信のいない上杉や、元就のいない毛利では頼りない、そこで織田家中の者にやらせよう、実行は光秀にその後は秀吉か家康に取り代えればいい、それとも義昭を返り咲きさせるか、・・・なんて構想を描くのはやはり武家ではなく公家でしょうね。結果的に改暦は回避され、雲上人の思惑はうまくいきました。大役を果たした光秀をさっさと見限り、家柄のない秀吉に莫大な金銀で高位高官を買うのを推奨し、彼らはめでたく生き延びたのです。後は知らん顔というのは源平時代からの得意技です。上杉・毛利・長宗我部・本願寺だけでなく危ういところで助かって狂喜した勢力は多数ありました。

本能寺の変の黒幕は〇〇だという説はいくらでもあるようですが、誰の仕業というより秀吉+家康+光秀+朝廷高官+その他みんなグルの結果と考えたらどうでしょうか。

そのとき久脩は何をしたのでしょうか？実は朝廷内の意向を光秀に伝えていたのではないか？若狭に行くふりをして実は光秀の城下亀岡に行った

のかもしれませんが。それとも西暦のことを考えていたのかも……。21歳で天文博士になったという俊才の彼のこと宣教師から聞いて西暦のほうが優れていることはすぐに理解できたでしょう。宣明暦であれ三嶋暦であれ、太陽太陰暦では閏の置き方がややこしい。閏月の置き方は19年間に7回というのが古からの習慣ですが、296年間に109回、315年間に116回……と精度のよい置閏法はいくらでもあります。その点、西暦では簡単です、ただし月齢は無視されるので日付だけでは月の状態はわかりません。太陽太陰暦の置閏法は非常に複雑で解説は割愛します。立場上、宣明暦擁護ではあるが内心は西暦導入。信長の強圧的要求も公家たちの消極的反抗もばかばかしいと思っていたのではないのでしょうか。もしも本能寺の変が失敗に終わり信長が天下統一を果たしたら、ポルトガル経由で一举に西暦を導入したかもしれません、イギリスより早くグレゴリオ暦を。さらに航海術・天文学などヨーロッパ科学技術を。

久脩は秀吉の世になっても生き延びますが秀吉の晩年、秀次事件(1595)に連座して多数の陰陽師が尾張に追放されるという事件が起こります。ところが関が原の戦い(1600)の後、ちゃっかり都に復帰しているのです。家康から梅小路(水族館あたり)に広大な土地をもらい、さらに家康・秀忠・家光の徳川將軍宣下式を二条城で司るという大役をこなし、豊臣滅亡後には従三位まで昇進しています。どうみてもタダのお公家さんではないですね。戦国の世を逞しく生き抜いたたたかな陰陽師であることは偉大なる先祖、晴明が藤原兼家・道長の厚い信任を得て安倍陰陽家を創設したのに倣ったのでしょうか！かくして陰陽寮制は明治2年の太政官制度廃止時まで続くのです。

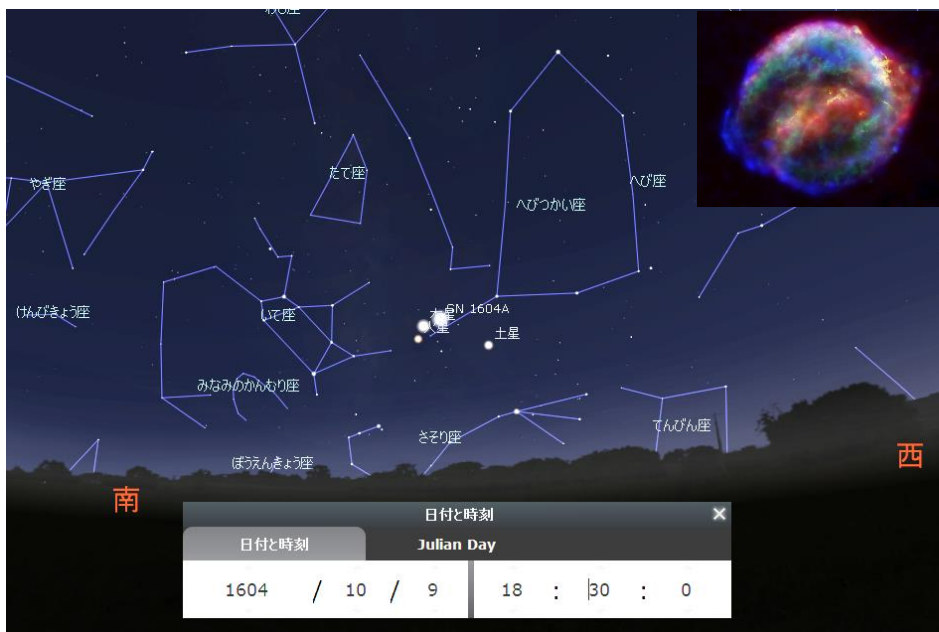
久脩の見たはずの天変は日食、彗星、惑星集合などたくさんあり、特に武田氏が滅び本能寺の変が起こった1582年には多数の天変が起こっています。それは公家の日記やキリシタン宣教師の手紙などに書いてあります。4月のオーロラは貴重な低緯度出現記録です。日食の起こった6月20日は和暦では天正十年六月一日、すなわち大事件の前日です。京都でも6割くら

い欠けた太陽が見られるはずでしたが、雨だったそうです。明智軍は闇夜のぬかるみの中を亀岡から京都へ進軍してきたわけです。

また注目すべきは彼の生存中に2回も超新星爆発が起きていることです。1572年にはまだ12歳ですが1604年には熟年に達し梅小路で安定した身分を保証されていました。観測の機会があったはずですが記録は見つかっていません。当時すでに日食は恐怖の対象ではなくなっていますが、彗星や客星はやはり不気味な天変で占いのネタにはなりえたはず、無関心だったとは思えません。まだどこかに彼の未公開の観測記録が眠っているのではないのでしょうか？

土御門家の菩提寺である梅小路の梅林寺には天文街道「暦合戦コース」で訪れます。また本能寺の変については「信長と天変コース」でお話します。

1564	6	25	5 惑星会合（日没後）
1572	11	11	超新星（ティコブラーエ観測）
1575	5	10	皆既日食（種子島） 0.85（京都）
1577	11	1	大彗星（ティコブラーエ観測）
1582	4		オーロラ
	5		大彗星（ティコブラーエ観測）/大流星
	6	20	皆既日食（石垣）
1584	5	2	5 惑星会合（日の出前）
1595	9	22	皆既日食（五島） 0.83（京都）
1604	10	9	超新星（ケプラー観測：下図）
1607	9		ハレー彗星



1604 年 10 月初旬の日没後、西南の低い空に木星・火星がその少し西に土星が集合していた。ケプラー（1571-1630）は自分の惑星運動法則を確認するためにこの惑星集合を観測していた。ところが 9 日に突如この天域に見慣れぬ星（ノヴァ）が現れた。発見者は多数いて誰が第 1 発見者かわからないが日本の陰陽師が見たという記録はない。ケプラーは詳しい光度変化を記録しており、最輝時には金星に次いで明るかったという。この後、412 年間わが銀河系内では超新星爆発は観測されていない。右上の画像は現在 X 線で観測されたもの。